

倉本一宏編

『藤原道長「御堂関白記」を読む』

(講談社選書メチエ)

講談社 一〇一三・一二刊
四六 一二二頁 一七〇〇円

本書は、二〇一三年にユネスコ記憶遺産に登録された『御堂関白記』を、自筆本や古写本に焦点を当てて解説したものである。

著者の倉本一宏氏は、記憶遺産への推薦に携わった一人で、本書に先立ち新書二冊(『藤原道長の日常生活』(講談社)、『藤原道長の権力と欲望』(文藝春秋)、いずれも二〇一三年)を出版し藤原道長の人物像を生き生きと描いている。「はじめに」では、記憶遺産への推薦書にまとめられた『御堂関白記』の特徴が紹介されており、古代日本の史料の価値を国際機関へアピールするという珍しいプロジェクトの一端を覗くことができる。

第一章〜第三章では、年次順に二十一のトピックを立てて『御堂関白記』の記述を取り上げ、同時代の古記録も用いてその内容を解説する。特徴的なのは、トピックごとに自筆本や古写本の写真版を載せ、それを観察することで得られる情報が全体に織り込まれていることである。自筆本での抹消や修正、書き誤り、裏書の使い方、墨継ぎの位置などに着目して道長がそれを書いた時の状況や心境が考察されており、写真版から得られる情報の多さに驚かされる。書名のとおり『御堂関白記』に基づいて叙述されて

いるのだが、写真版を活用することで史料に雄弁に語らせ、自筆本が残されていることの価値を強く教えてくれる。

加えて「番外」として、安土桃山時代の公家である近衛信尹によつて自筆本の寛弘五年秋冬巻の紙背に記された『後深心院関白記』の抜書について述べる。この抜書の存在についてはすでに土田直鎮「御堂関白記解題」(『奈良平安時代史研究』吉川弘文館、一九九二年、初出一九八四年)が触れているが、信尹の嗣子信尋が書いたという標紙外題とからめて詳述する。日記の裏に別の日記を写すという行為には何の目的があったのか、より詳しい事情が明らかになることが望まれる。

終章では「日記」という資料群にまで視野を広げた上で『御堂関白記』の特徴を分析する。指摘された点は多岐にわたるが、特に注目されるのが、裏書についての新たな知見である。一般的に、裏書は表に書ききれないものを裏に続けて書いたものと理解されるが、『御堂関白記』においては表で記述を終えた上で改めて裏の記述を始めた例が多く、道長が裏書とすべき内容を選んでいたことが推測され、その内容とは自身が主催した儀式や法会への人々の出欠や自身が下賜した物の明細であったことを指摘する。便利な活字本やデータベースに頼ることに著者は苦言を呈するが、写真版から多くの重要な情報を読み取って書かれた本書において、その言葉は大きな説得力を持つ。

本書の内容は専門的な部分が多いが、文章中に用語の説明が加えられているほか『御堂関白記』本文には現代語訳が付されており理解が助けられる。また、史料としての『御堂関白記』を解説

するものではあるが、藤原道長の伝記としても読める構成となっており、道長という人物の面白さに引き込まれる。初心者にも読みやすい本でありながら、単なる概説ではなく新知見も盛り込まれ、「日記」の機能、史料の活用といった課題にも言及しており、研究者にとっても得るものが多い一冊である。(林 友里江)